

科学的認識における客観と主観—マルクス学位論文を題材として—

加戸 友佳子 (Kado Yukako)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 博士後期課程

本報告は、マルクスの学位論文『デモクリトスとエピクロス其自然哲学の差異』の客観・主観認識について考察し、近代の科学の認識論について一定の示唆を得ることをめざす。

近代の科学的認識は、客観と主観を峻別し、主観を排除して客観的真理を追究するものとして捉えられがちである。こうした認識論は、デモクリトスのそれと親和的である。しかし今日、こうした認識論に対し、様々な異議申し立てがなされている。量子力学や複雑性理論はすでにこの認識論に反する知見を提出してきている。現実的な社会問題においても、これは問われている。例えば原子力発電所の事故・再稼働等をめぐる見解の相違や対立は、はたして「客観的真理」を争うものなのか。客観的認識の深まりや科学的知識の普及は、「正しい」回答・合意を導き出すのか。そして客観的・科学的認識において一般に市民よりも専門家の方が優越しているとみなされることが多いが、それは本当なのか。これを扱ういままでの研究は、科学者と一般人の相違—採用する規準、「合理性」、知識等—に注目していた。彼らを共通にとらえうる考え方は見いだせないだろうか。

マルクスは 1841 年、自らの学位論文において、古代ギリシアの原子論者である、デモクリトスとエピクロス其自然哲学を、その知識論・認識論の点から比較し、エピクロスを高く評価した。

デモクリトスは客観と主観を峻別し、客観的知識としての真理を求めている。だが彼にとって、人間の感覚は、主観的仮象であり、知の追究においては、哲学者本人の経験の矛盾となる。原理的に不可能な客観性を、哲学者自身を世界の外に置くことで実現しようとする。そして、必然性や決定論によって自然を説明する。

エピクロスにおいては、感覚は客観的現象であり、信頼できる規準である。彼にとって哲学の目的は、自然の認識ではなく、本人の満足であり、感覚に適合する説明ならば、なんでも受け入れる。また、決定論的な法則から逸れる偶然性、恣意性を自然の説明において重視している。特徴的なのは、自然を対象とする場合でも、哲学をする自分自身に意識が向けられていることである。

マルクス学位論文は従来、ヘーゲル等から影響を受け、後の『資本論』に結実するという、マルクス思想史の流れの中で解釈され、学位論文執筆時は「未熟なマルクス」であると捉えられていた。1970 年代までの先行研究のほとんどはこの立場に属する。また、それに対して、マルクス思想史の「必然的」な流れの中でマルクスを捉える姿勢を批判する構

造主義の立場もある。

マルクス学位論文の固有の意義を認識する立場は近年、人間と自然の関係を問うエコロジー思想の研究として出てきている。また、マルクスはエピクロス自身の自己意識の反映としてエピクロス哲学を捉えていると解釈する立場もある。

本報告では、これらの先行研究をさらに批判的に検討し、マルクス学位論文の科学認識論としての現代的意義を確認したい。そして、①自然の必然性、決定論的説明を克服した認識論を創造すること、②決定されない人間の主体性・自己意識を、それを把握する知的探求者自身の主体性・自己意識をも対象化する形で把握すること、③自然一般ではなく、あくまで人間に固有の主体性・自己意識を重視すること、等の諸点を確認・検討したい。